

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：31307

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2016

課題番号：15K16669

研究課題名(和文) 戦時下朝鮮・満州映画人の越境的活動に関する実証的研究 李台雨・李香蘭を中心に

研究課題名(英文) An Empirical Study on Transboundary Activity of Chosen Manchuria filmmakers in Pacific War

研究代表者

李 敬淑 (Lee, Kyoungsook)

宮城学院女子大学・学芸学部・准教授

研究者番号：80723048

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：戦時下の日本人映画人は、日本内地にとどまらず、植民地朝鮮や占領地満州などの外地に赴き、越境的な映画活動を広めていった。ところで、こうした「越境する映画人」は日本人のみだったわけではない。朝鮮の映画人たちの多くが満州の映画業界で活動し、満州の映画文化や映画スターもまた朝鮮で受容されていた。

そこで本研究では、満州映画協会の朝鮮人社員・李台雨(イテウ)と朝鮮人観客に朝鮮人女優として想像されていた李香蘭の事例を中心に、外地と外地との間における越境的な映画活動の実態を解明した。また、彼らの活動が大東亜映画ネットワークの形成にいかなる役割を果たしたかについても実証的な分析を試みた。

研究成果の概要(英文)：In Pacific War period, Japanese filmmakers went to outside areas such as colonial Korea and Occupied Manchuria, not just in Japan, and spread cross-border movie activities. By the way, these "cross-border filmmakers" were not only Japanese filmmakers. Many Chosen filmmakers worked in the movie industry in Manchuria, Manchurian filmmakers and movie stars were also accepted in Chosen movie culture. Therefore, in this research, we focus on cases of Lee Ko-lan who was imagined as a Chosen actress for Chosen movie audience, and Lee Te-woo who works on the Manchurian Film Institute as Chosen filmmaker. I clarified the actual situation of their cross-border movie activities between Chosen and Manchuria, and the I also tried empirical analysis on the role of their activities in forming the Greater East Asia Film Network.

研究分野：映画学

キーワード：朝鮮映画 満洲映画 越境 李台雨 李香蘭

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初までにおいて、戦時下の日本における映画人の越境的な活動に関する研究は、以下のように二つの傾向をもっていた。

(1) 内地・外地をめぐる一方通行的研究

日本内地から植民地・占領地などの外地に渡って映画活動を行った日本人映画人たちに

関する研究(内地 外地)

もしくは、外地、特に植民地朝鮮から留学などを目的に来日した外地人映画人たちに

関する研究(外地 内地)

上記の と は、内地から外地へ、あるいは外地から内地へという一方的な方向性だけに重きを置いた研究であった。

(2) 内地・外地の相関関係に関する研究

こうした中、応募者は平成 24~25 年度文部科学省科学研究費特別研究員奨励費(人文学領域)の研究の中で、日本人女優・田中絹代と原節子、朝鮮人女優・文芸峰と金信哉を取り上げ、日本と朝鮮の女優表象が内地と外地を越境していかに受容されていたかについて考察した。その結果、未開拓であった、戦時期における日本人(朝鮮人)女優の朝鮮(日本)における受容状況が明らかになり、そこに帝国と植民地映画の国際進出への欲望が絡まっていた事実が裏付けられた。つまり、女優表象を軸に内・外地間(内地⇄外地)の越境的な映画交渉のあり方を浮き彫りにしたのである。

しかし、上記のような研究蓄積には、次のような 2 点の課題が残されていた。まず、内地から外地へあるいは外地から内地へという視点のみでは内地と外地との間の映画史的接点(外地⇄内地)を明確にすることが出来ない。また、戦時下のアジア映画についていえば、全くないといっても過言ではないほど、外地間の越境に関する基礎的な研究が行われておらず、これは大東亜映画ネットワークの形成過程における外地間交流の問題が検討されないまま放置されていたことである。

そこで、植民地朝鮮と占領地満州の映画史的接点について綿密に検証を実施したところ、研究対象として李台雨と李香蘭を取り上げることとした。それには各々次のような理由がある。まず、李台雨は満州映画協会宣伝部の朝鮮人社員であり、『満鮮日報』『満州映画』などを中心に活動した在満朝鮮人文化評論界の権威者であったにもかかわらず、映画史の研究対象として学問的に検討されたことがほとんどなかったからである。一方、李香蘭は日本人満映スターとして広く知られ、関連研究も多数存在するものの、朝鮮人観客たちが彼女を朝鮮人女優として、つまり植民地朝鮮の血肉として想像したことや多くの朝鮮・満州合作映画に出演したことなどについては考察されていなかったためである。

2. 研究の目的

上記 1 の研究背景や問題意識を踏まえた上で、本研究では、戦時下の大東亜映画ネットワークにおける内地と外地との間の越境について詳細な分析を行った。研究の目的をより具体的に示すと以下の通りである。

(1) 知られざる満映の朝鮮人社員・李台雨の映画活動を明らかにする。

李台雨が映画史的に極めて重要な人物であるにもかかわらず、彼に関する研究成果がほぼ出されていない原因の一つに、深刻な資料不足があった。李台雨についての間欠的な言及では、彼の活動は勿論のこと、正確な生没年すら判らない有様である。そのため李台雨の業績や事跡に関する調査を実施し、貴重な発掘資料の所在を確認した。それらは李台雨という名で寄稿された朝鮮語文献から津村芳夫もしくは津村英雄という名で発表された日本語文献まで多岐にわたる。これによって謎に包まれていた彼の事跡を一気に解明し、当時の朝鮮と満州との間の越境的な映画活動の実像を明らかにした。

(2) 「朝鮮人女優としての李香蘭」について明らかにする

李香蘭はいかに呼ばれるべきか。中国語ではリシャンラン、日本語ではリコウラン、朝鮮語ではイヒャンランと呼ばれた李香蘭は、戦時下の日本映画、ひいては東アジア映画の近代を理解するにあたって問題のかつ越境的な重要人物である。しかし、李香蘭の研究は不完全な水準に甘んじてきたと考えられ、その原因の一つに「朝鮮人女優」として想像され受容されたイヒャンランの存在が看過されてきた点が挙げられる。朝鮮における李香蘭の活動は山口淑子本人の自伝においても言及が避けられている。そこで満映のスター李香蘭が植民地朝鮮の観客たちにいかに受容され、いかなるロジックで「実は朝鮮人」「我々の血肉」と誤解されたかについて実証的に明確化する必要があったのである。

3. 研究の方法

(1) 李台雨の場合

李台雨が映画活動を行った地は、大きく二つに分かれる。第一には朝鮮(1934~1938)であり、第二には満州(1939~1945)がある。本研究で基盤調査した結果によれば、李台雨は満州に赴いて 1939 年 11 月から『満鮮日報』の記者と満州映画協会の宣伝部員とを兼職しながら、雑誌『満州映画』に日本語で映画評論を、『芸文誌』(1940 年 5 月号)に中国語で文学評論を寄稿した。また、津村芳夫・津村英雄という名で朝鮮と満州の合作映画制作をめぐる座談会に重要メンバーとして参加し、満州映画協会内の朝鮮映画部設置に励むなど、彼は在満朝鮮人映画界の中核的な位置に置かれていた。

その一方、朝鮮における李台雨の活動は、『朝

鮮日報』の新春懸賞文芸論(1934)をはじめとする文芸評論が多いのが特徴である。これらの資料は満州における活動の土台になっている点で極めて重要な初期資料であるが、朝鮮各地の新聞社と出版社を通して出されていたため、研究開始時点ではその文献が文字通りに韓国全国各地に散らばっていた。よって、すべての資料を網羅的に入手するために本課題研究の初年度には資料収集作業に力を入れた。

資料収集の後、李台雨の事跡に関する詳細な分析を試みることにした。彼に関する従来の研究成果がゼロに近いので、分析材料の全てが新しい資料といえるものであった。資料分析をもとに、今まで未解明だった 彼はなぜ満州に赴いたのか、 彼が満州で行った活動は具体的に何か、そして 彼が満映内に朝鮮映画部を設置しようとした動機は何か、という一連の問題を解明し、彼の映画活動の実像を明らかにしようとした。その上で、今まで殆ど知られていなかった朝鮮と満州の映画界に關係を明らかにすると同時に、李台雨の越境的な映画活動がそれに与えた影響について分析した。つまり、大東亜映画ネットワークの形成における李台雨の業績および位置づけを明確化した。

(2) 李香蘭の場合

李香蘭に関する韓国側の資料収集にも李台雨同様の困難さがあった。植民地朝鮮の映画観客が初めて満州映画を観覧したのは 1939年の事で、『冤魂復仇』(1939)という李香蘭主演の映画がそれであった。『冤魂復仇』以来、『美しき犠牲』(1939)、『白蘭の歌』(1939)、『支那の夜』(1940)などが朝鮮内でも相次いでヒットしたことで、彼女は朝鮮全国の大都市(釜山、大邱、元山、平壤等)を巡回しながらアトラクション公演の舞台に立ち、様々な製品の新聞広告に彼女の顔写真が用いられるのがブームになった。こうした朝鮮における李香蘭の活動や受容に関わる資料は、各地方都市で発行された新聞にも数多く残されており、それらの収集には1年の作業期間がかかった。

植民地朝鮮の首都・京城のものから韓国各地の地方紙やローカル版雑誌までを総合的に収集・検討し、従来の研究が見落としてきた資料の発掘にも力を入れた。これらにより研究領域の開拓および定説の批判や修正が可能となった。また、李香蘭の朝鮮における事跡と受容の有様を明らかにした。彼女に関する研究が現在まで数多く出されてきたにもかかわらず、日本と満州のみを中心とする、即ち彼女を「満州」で活動した「日本人」女優とみなす観点に捉えられすぎた結果、朝鮮と李香蘭、そして大東亜映画ネットワークと李香蘭の関連性を立体的に分析することに弊害が多かった。本研究ではこうした従来の観点への反省から李香蘭に関する既存の定説を再検討したといえる。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

李台雨の場合

李台雨の映画活動に関する未発掘資料を入手することができ、生没年さえ不詳だった知られざる存在の詳細を明確化した。1939年11月から『満鮮日報』の記者と満州映画協会の宣伝部員とを兼職しながら、雑誌『満州映画』に日本語で映画評論を、『芸文誌』(1940年5月号)に中国語で文学評論を寄稿した彼の記事、対談、エッセイなどの文献資料を集め、彼が津村芳夫・津村英雄という名で朝鮮と満州の合作映画制作をめぐる座談会に重要メンバーとして参加したこと、満州映画協会内の朝鮮映画部設置に励むなど、在満朝鮮人映画界の中核的な位置に置かれていたことも明らかにした。

李香蘭の場合

李香蘭に関する映画関連報道記事や彼女のインタビュー資料など、植民地朝鮮側で彼女に関して言及されている未発掘文献資料を手に入れることに成功した。また彼女の歌唱シーンが収録されている朝鮮映画フィルムデータの一部を入手し、朝鮮人観客が当時見ていた李香蘭の姿をより立体的に分析することができる材料を確保することもできた。これにより今まで公開されたことのない朝鮮民族衣装をまとった李香蘭の異色の姿も確認できた。日本内地あるいは満洲外地における活動だけに焦点化されていた李香蘭の映画活動の幅を広げ、再考察することにつながられた。

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

上記(1)で述べたように、本研究課題の成果として入手した資料は、ほぼすべて従来の映画研究界に公開されたことのない新しい資料である。存在すら注目されなかった在満朝鮮人映画人・李台雨のケースは言うまでもなく、一般にも知名度の高い映画スター・李香蘭に関する資料さえも日本の映画学会では紹介されたことのないものであり、これらが国内外で紹介されると非常に斬新でインパクトの高い映画発掘資料として位置づけられると考える。また、資料の新しさだけではなく、研究の幅を広げ、今まで着目されなかった研究分野の開拓にもつながるものとしてその意義が認められると予想される。

(3) 今後の展望など

これからは、2年間入手してきたこれらの資料を発表していく作業に入る予定である。もちろん、研究期間内に発表したものもあるが、これからは日本国内だけではなく、中国や韓国、そしてアメリカの映画学会での発表を行いたい。(すでに、宮崎で行われる全国規模の学会(日本国際文化学会)や中国で開かれる中国・韓国・日本共催の学会(第五回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム)で

の発表が確定されている)
なお、2017年度から朝鮮と満州、即ち外地と外地間の越境的な映画活動に関する他の科
研費も取得できたため、後続研究としてこれらに関する研究活動を継続していく予定で
ある。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

李敬淑「原節子再論(3) 戦争と表象」
『日本文学ノート』第52号、2017、45~62
頁、査読有り(掲載決定)

李敬淑「満映という幻の舞台 雑誌『満
洲映画』と李香蘭」『人文社会科学論叢』第
26号、宮城学院女子大学人文社会科学研究所、
2017、7~12頁、査読有り

https://mgu.repo.nii.ac.jp/?action=page_s_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=275&item_no=1&page_id=13&block_id=21

李敬淑「原節子再論(2) 表象の形成
と屈折」『日本文学ノート』第51号、2016、
45~68頁、査読有り

李敬淑「植民地朝鮮における活動弁士表象
の変遷」『アジア文化研究』第2号、東北大
学アジア文化論学術雑誌、2016、39~48頁、
査読有り

李敬淑「原節子再論(1) 神話の構築
と解体」『日本文学ノート』第50号、2015、
98~110頁、査読有り

〔学会発表〕(計4件)

李敬淑「ナショナル映画を超えて 植民
地朝鮮における李香蘭の受容」第五回中日韓
朝言語文化比較研究国際シンポジウム、中国
延辺大学外国語学院・日本学研究所主催、
2017年8月19~20日、中国延辺(発表確定)

李敬淑「<民族>として想像された女優
植民地朝鮮における<李香蘭表象>の受
容」日本国際文化学会第16回全国大会(宮
崎公立大学)、2017年7月8~9日、日本宮崎
県宮崎市(発表確定)

李敬淑「満洲の残照 映画、文学、教育
の光景」宮城学院女子大学人文社会科学研究所
主催、2016年11月5日、日本宮城県仙台
市

李敬淑「山口淑子、李香蘭、シャーリー・
ヤマグチ 「映画」と「戦争」を生きた女
優」みやぎ県民大学大学開放講座講演、宮城
学院女子大学主催、2015年11月6日、日本
宮城県仙台市

〔図書〕(計1件)

李敬淑「<二つの舌>をもった文藝峰
<植民地発コクゴ映画>における女優表象」
加藤幹朗監修、杉野健太郎編著『映画学叢書
映画とイデオロギー』(共著)ミネルバ書房、

2015、1~22頁、総ページ数:308

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

李敬淑(KYOUNGSUK, Lee)
宮城学院女子大学・学芸学部・准教授
研究者番号:80723048

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号:

(4) 研究協力者

()